膝出せとすゝめる梢の馳走哉

笑顔して今年はといふ青田哉

暑き日や立寄かけも漆の木

是等の作は得意の新しみにて。又不易の塲もなきにあらす

一日の春雨竹にたもち　けり

力丈起あかりけり露の秋

桐おちた外に事なし留守の庵

是等は虬朗兩哲にもゆつらさる處なり。此叟の美事擧て算ふるに遑あらす。門人にも。林曹。素屋。淡節。可大。爲山。大夢。年風。柳壺。此外世に知られたる者。尚多し

嘉永五年七月朔日沒年八十四

○鶴田卓池の美談

卓池は參州岡崎の人。鶴田氏通稱與三衛門。曉臺門人號青々處畫をよくす。門人あまたありて。岡崎正風と唱ふ。始曉臺門人後士朗に屬す。門人に水竹。塞馬。流芝。三岳。完伍。蓬宇等ありて。當時隆盛なり。士朗叟江戸行の供たらんとて。後より追かけたる勢ひにや

蓑の毛の顔にかゝるや春の風

忘れては杖買ふ花の木下かな

信濃のあだ坂の麓にて。四十はかりの女幼きものにはくれたりとて。涙は笠をもれ出たり。見るも哀にかくいひきかせぬ

別れても終あふ道そ母子卿

逢初川

山吹にこぼるゝ人のこゝろ哉

海道はみな麓なり不盡の山

風に身をすり〳〵歸る雲雀哉

芍藥のあひに麥まく庵哉

此外句多し。此叟は人に物書いて與ふるを惜ます。故に口碑にのこる句もおほかるへし連句に參河三吟あり

辭世　いさゝらは迎ひ次第の月の宿

弘化三年八月十一日沒年七十九

○兒島大栁の美談

大梅は江戸の人。初名孤山。大梅居又剩庵江戸鹽岸島に住す又八丁堀地藏橋。市川寛齋門人。儒を捨て俳諧に入。道彦に學ふ。俳門中の學者なり。或時龜田鵬齋曰。子は漢學士ならすや。俳諧に入ていかなる處か樂しきや

大梅微笑して云て曰

河豚くはぬ人にはいはし河豚の味

鵬齋先生是より。河豚の仲間入せんとて。折々發句つくりしか。發句は大梅に及はすとなり。仙臺塩竈にて。烟波亭を營む時。和漢一折

○

烟波々々四面に秋の風たかし　大梅

掛鏡　月　天心　松嵐

松針に貫ぬきとめぬ露ならん　車海

蚯蚓の聲の釜たきり出し　阿亭

剪青竹塵箸　梅

壓白梅紙衾　嵐

から〳〵とよく蒟蒻の氷る夜に　亭

明星ひとつのこる山の端　海梅

寐覺里鐘寂　梅

思慮橋雨淫　嵐

銀屏芹燒課　梅

かへると見せて遊ふ蝶々　嵐

花七日東坡か貧をかさねけり　亭

月亦奇奈今　梅

渡る鴈いくらも友を呼つれて　海

かふりふらせる芋の初風　亭

碁遊初段上　嵐

箏酌八橋深　晋齋

和漢の連句多かれと斯如者まれなり。是先生の學術の功なるへし

市原多代女の美談

多代女は陸奥國岩瀬郡須加川驛の人。市原元輔の母。若して夫に別れて不學動能家を治め子を敎育して家益榮ゆ。俳諧に遊ふ事六十餘年。松窓乙二の門に入。男子のおよはさる處。皆句上にあらはる

はなやかに年は寄たし飾海老

誠に女生の情なるへし。彼小町の歌にも

○俤のかはら傳としのつもれかしたとへ命に限りありとも

稚子や膝に立せてころもかへ

わ、ひし氣に猫のまはるや蠅の外

とう見ても女生の句なるを思ふへし。ある俳諧の天狗松島へ下道々の句とも書て出して。獨剛慢不遜の勢ひなれは。老婆聲柔らけて對面し。

是迄數多松島へ下る人もありたれと。紀行の句細々書て見する程の人はいまたあらす。昨夜御宿もとより御遣しの發句拜見致し。芭蕉翁の再來にもやと思ひましたといへは。客鼻をひくつかせて。心のまゝに天狗をいひちらして。かへりしといふ事は。兼て聞たりしか。ある時其老人長くこと手紙に書。須加川の多代女すら。吾を芭蕉の再來と見たりなと自負するを見て。始めて多代女か眼力の高きを知れり。若通情の人にかゝる麁言を放さは。立腹せざるへからす。然るを却て悅ひて忘れ得さる人物と知りたるぞ怖しき

衰へや桐ひと葉にもあとしさり
つく杖や獨りにほしき虫のこゑ

此二句は老後の句也女なれは句意皆やさしけれと人を見る事前の如し

文久三年九月沒年九十三

○山邊清民の美談

清民は。陸奥國。若瀨郡。須加川驛の人。山邊氏。諱頼之姓は平。號觀山居。寛政五癸巳年生。幼より俳諧を好み。父應之に隨て學ぶ。長するに及て祖翁の正風を味ひ。遡て一家獨立す。和漢の學に達しおのつから。君子の風儀あり。世上の俳人と日を同して談すへき器にあらす

吾從弟のもとに宿りて。老人を訪ひけるに。却て從弟は他人より倦安きものぞとて　いとこより親しきものぞ花の友

物さらぬ行脚の氣はかり強くてなとといふ咄しの折

椋の實の生てもといふ榎かな

己みき雄老人に句評を請ふ事屢ある時

葉先から白雲わくや夏の艸　みき雄

鐘つけはふと歸り行鹿の子哉　仝

といふ句を擧て汝いまた年若にして。かく危き處をこのめは。未は梅室か如く。口かるになるへし。今より案しらるゝといふ評なりしか。如斯堅固にして奇怪を求めす。實に師の任たるへき老人なりき

旅人に成た朝からやなきかな

北窓に衣さくおとや梅のはな

笠島やみの輪をかけて行時雨

慶應三年十二月九日沒年七十五

○足了庵禾月の美談

禾月は。仙臺藩士。横田與平次の母。清水小路に住。初名龜丸。乙二門人。後江戸に出一具庵一具に從ふ國に歸りて開庵舍用禾月一止とて。仙臺三大宗匠なり。されと流石女のやさしみありて

眉あらは吹かせて見たし春の風

上ひとつぬいて日長きはなし哉

安政四年沒す年七十

○三浦浪分女の美談

浪分は。陸前國氣仙郡。東山薄衣町。三浦喜十郎の女。名は美惠子幼より俳諧を好み。父蛙丁と共に句をいふ。人是を奇女とす。十六歳にて。仙臺に出五梅庵舍用の弟子となり居る事五年。又江戸に來りて。可布菴逸淵叟の門に入。師の骨肉を得て。心術男子にゆつらす

蟷螂や斧はこゝろの影法師

など一節別なる句ともを作りてみつから樂しとせり

大空を笠に着てうつきぬたかな

是等は女のたよわきを、見せましとて。師の口真似をしたるか如し

蝶鳥のましはりらしや羽子の友

味噌汁をすましてあきわらひ哉

黄鳥の遊んで來ては鳴にけり

是等はやさしき見立にて。女の約やかなる趣向なり。又女の情にとりて忍ひかたきものは

七夕やをとこのまらぬ物思ひ

幾度かたふれんとして女郎花

鬼も十七とやら。妙なる美女にならさるも。十六歳より三十二歳までの困苦いふへからす

元治元年十月十六日沒年三十二

○藤村奇水の美談

奇水は。東京の人。横濱壽町二丁目に住す。板木職名は辰藏上毛澁川驛後藤月叟子。此奇水を予か門に入れん事を乞ふ。予諾して其句の評をする事。一年餘。天稟にして予か及ふ處にあらす。されといまた若者なれは。横濱なる。友昇。嵐松等にも。語りて引立むことを依頼す。人々奇となし妙となせとも。敢て喜はす。只句作を好みて予か許におくるのみある時

戀猫やあのふか岡のおほろ月

とよみしかは。人々うらやみてさま〳〵地名をあなくりもとめ。作り試みる中に。淺草今戸町柳叟なる者

うかれ猫妻戀坂にまよひけり　柳叟

といふ一句を持來りて。自誇りて。是は横濱の奇水か句と如何にといふ。予答て云。奇水か句は忍ふか岡といふ言葉より。戀の字に思ひよせ。臨月と投捨たる詞の情言語に霊しかたき妙あり。子か句もうかれ猫の妻戀ふとといひつゝけて。迷ひけりの詞。理に落て奇水の句に及はさる處あり。此兩句兄弟ならは。子か句必弟とならんといひ。又此頃奇水の句の聞えたりとて出せしに是も妻戀坂なるそいとをかし

蝶ひとつ妻戀坂をとほりけり

と書て見せけれは。柳叟膝を打て悦ひ。此奴凡人ならす。憎き小僧かな。蝶ひとつといひ。妻戀坂に力をもたせ。下五文字を通りけりと。打なくりたるかへす〳〵も憎き奴と。いひつゝから〳〵と笑ひ出したる。流石に柳叟なりと予も嬉しかりき。其後明倫社に來る毎に。未奇水の句は來らすやと問ふ。奇水に引かれて柳叟の熱心になりたるぞ。實に門より入る者

にあらす。門を叩かれて内より開いて押出したる勢ひあり。其後奇水の手紙。予と柳叟と對話の中に着す急きて開き見るに

○こたひ去りかたき。公邊の事おとりて。父の東京におもむかるゝか。日を期して果へき限りもあらされは。留守中の事なともつふさに承り停車場までおくり別る

うらやまし雁は旅寐も親子連

此句ありけれは。思はすも二人泪にくれて。おはらく物もいはさりしか。柳叟泪をはらひ申樣。此小僧只板木屋にて生涯終らせん事いと口惜。千里の名馬ありて。之を知るの伯樂なからんや。兎も角も今爰に師と吾と。彼か駿足の性あるを知りて捨おくへきにあらす。是を養ひて師か子とし。明倫社の相續をなさしめむと。共に相圖て其事を奇水に告く。彼答て云。吾もとより願ふ處。父母老たりといへとも。幾分かの稼あり。此事を聞

かせなは。如何計悅ふや知るへからす。されと我子たるの道とし親を養はさるは意にあらす。我一人前になりて。父母を養ふ事を得る間。一ケ月金五圓宛、父母に給はらは。速に板木職を投棄して命に隨はんといふいと安き事と。柳叟及予も諾して事定りたれと。胃病にて死せりといふまては。自在法俳諧の部に出せり。此長成板木師なとの行狀にあらす。某和尙に參して禪學に心をよせ。哲學理學の如きも人知らす。心を盡して夜も寐すと其母の歎きなり。明治十四年の冬にや予かもとに發句おくらんとて認めたるまゝに泉下の客とはなれり

とり分て夕榮え嬉し大三十日

よそ眼には樂しさうなり節季候

來ては行年やおほろに　二昔

此句は何となき。發句なから二十一年の夢覺る心にや。辭世の句といふ

も當らんかし又春の句秋の句も書ませたり

朝貌やせめては母の眼覺まて

夕月やゆふへ〳〵のたもしき

蜘の巢も眼さはりになる夕夜哉

鶯や高うも飛はす地もふまず

折かけて月にはつかし梅の花

此外句多しといへともあなくり索るにいとまあらされは略す

○七才ふて子の美談

ふて子は岩代國。安積郡小原田驛。疊屋某か女。父母に仕へて至孝なり此疊屋は。舊脩驗にて。別に風流かましき事はせされとも。庭の內に菊なと作りて置けるに。母の病氣にて。ふで女寐食を忘れて。物あんし居たる

に。醫者の來て菊を譽ければ

眼にふれて心には見す菊の花

姉か嫁になりたる時

やさしさや鐵漿合せて花すみれ

人々此子の句を作るを怪み誰かよみてあたふるならんと嘲りければ

ちさくとも咲てはないか菫草

とよみて居合せたる人に書いてもらひたれは。人々あきれて嘲るものなくなりしとぞ。是は郡山町。永戸氏の妻さた女の話なり

○河原悠々の美談

悠々は。肥前大村の藩士。河原元治。著虬門人。天保弘化嘉永の間。九州の一人なり。或時江戸に上り。集を編みて薄苞集といふ。梅室著虬鳳朗等の連句あり。人よく口碑にとゝむ。又悠々附合集。筑紫句集。等の選あり八十の賀集を。米の芽集といふ

人並に何そ提たしはるの風

凍とけて池は古きにかへり鳧

安政三年八十二歳にて沒す

○椿月杵の美談

月杵は。下總國香取郡猿山村字源田河岸の人。椿仲輔の長男。幼名泰次郎仲輔國學を主張して。京都に出。敲山に登りて。一切經を講す。終に敲山椿寮に於て沒す。泰次郎上京して。父の遺骨を携へ歸りて。古郷の墓地に納む。其身江戸にあり。俳諧を嗜みて初名里椿。惺菴西馬による。商業の傍に是を行へとも天性備りたるにや。忽道に達し妙手にいたる。口外する物

發句ならさるはなし

靜さや上見ぬふちの花こゝろ
敲入やとりはやさるゝ雪の袖
一日の位となりぬ朝こゝろ
老か戸に植るものなら柳哉
稻妻や涼しきはては峰の松

月の露くらい處にこぼれけり

此叟若かりし頃。定吉といふ小僧あり。用事先にて。桃の花をたをりて。畑主に見咎められ。泣々かへりけるに。其ゆゑ由を問へは。桃の花既に開かむと紅くひ出たる姿狀よろしけれは。一枝且那の土產にせんと折たるなりと。いと悔し氣によゝと泣けれるに。主よし〳〵其方か志し譯りたりとて畑主に詫狀をかき

今朝丁稚定吉。滑川迄用事に遣し候處貴殿の桃のいと美しく咲たるを。予か發句する爲に彼等迄花をめつるの志しをおこし。畑中へ陷入候よし御ゆるし被下度候

盜人のたねは我なり桃のはな

と書てやりたれは。畑主桃の枝三本はかり剪て。おこせしとぞ。今下總の國に。正風俳諧の殘りしは。此叟の門人なり

明治十五年七月八日沒す年六十一

○一具莊一具の美談

一具は出羽國。最上の人。福島大圓寺の隱居名は愚春。白石の乙二の門人磐城の山崎專稱寺二老たりしとぞ。後江戸に出中橋油坐に住む當時梅室著虬鳳朗に次又畵をよくす。初名夢南。後一具山崎專稱寺。大澤の圓通

寺は芝十八檀林別格の二大寺にして皆上人に坐するを望むさるを二老にして投棄し。俳諧に遊しは脫俗の僧といはんか

開庵の時

たとりつく道の細さや草の霜
花あれは道なり雲の高根まで
夫ほとに鳴るゝものを時鳥
五月雨や油買ふにも川むかひ
忘れたき事はわすれす秋の風

嘉永六年十一月十七日沒す齡七十二深川靈岸寺に葬る

○松平四山の美談

四山子は。雲州毛里城主松平志摩守實松平參河守殿次男號東幻住菴と禪學を好み時々。建長寺拙堂和尙を招待す。或時和尙弟子と七人同伴皆席に着す。是に薄茶を出さんと。七碗一度に出せは。和尙袂より打金を出して打。その音に隨て茶碗を揚け茶を喫し一同に茶碗を置て。手を膝にす其列の正しきを悅ふ。或時鎌倉に遊ふ寺々を見めくりて。光明寺に到れは。葵の金紋きらひやかに光りぬ四山子曰鎌倉にては。笹、龍膽又は三大なとの紋は。いとゆかしく昔を慕ふおもひあれと。葵は實に名聞といふ紋なりと宣ひけれは。人々感し入しとぞ。其頃の勢ひにては。葵ひを附る方ならては斯いひかたき詞なり。俳諧は鳳朗に學はせ給ひ。書は嵯峨樣書は狩野家なり。殿樣藝にはあらで。實に寂たるものなり。芭蕉翁百五十年祭の事なとも此君の注意不少

元日も先しつかなるゆふへ哉
見ぬふりをすれは霞の晴に鳥

いつ來ても春の心や東海寺

○草野聞二の美談

聞二は陸奥國宇多郡中村相馬の藩士草野氏通稱半右衛門鳳朗門人經濟の實行に長したり天保年間相馬家の財政困難を極め草野氏をして家政改革に及しかは三年にして負債を消却し以後年々の餘財を給人に(相馬給人は鄉士牧士の類)預け安利を以て貧民を救ふの法を施し上中下豐饒の國となり相馬の家來草野半右衛門は經濟學者と評判に成髭ケ關黑田筑前守殿家來肥田軍治と云者に命して曰向屋敷相馬家は高六萬石なり家來に經濟學者ありて三年にして負債を消却し追々の餘財家を裕にし國を富ませしと云吾家の高五十六萬石改革の仕やうによつては必國を富すの法なからんや汝草野半右衛門によつて學ひ

來るへしと主命に依て肥田軍治草野半右衛門を訪ひ主命の趣を演けるに草野氏云何處の御屋敷にても金主を作るものを登用して是を消却するの法をなさす先經濟の奧儀たるや其家の相應の法を起し借金を返さう〳〵と云念の絶えざれば必三年を越さすして消却し終るべし大名の身代にして借金位は小細の事なりといひて何も外に傳ふる事なかりしとぞかゝる大量の人ゆゑ俳諧も常には忘れたるか如くなれとも其氣の乘たる時は寐食を忘るゝ程凝る事あり

曰人「元日のめて度日にも老にけり」と光陰を恐れたるもをかしけれは我も又

元日のもおこたらぬ利足哉

思處

似我蜂の出來ぬ願ひも叶ひ鳥

沒年嘉永三年頃にや不詳

○小島父々の美談

父々は幕府の臣　小島利太夫野州日光山に生る初名小島甚兵衛日光勘定役を勤む後江戸へ出利太夫と改む小菅籾土藏奉行又御金藏奉行に轉俳諧熱心世に類ひなしといふへし百員の連句四五十卷つゝたえす句は一季一千句つゝ云事とせり治世に武事を失はす

鳴かぬ間も耳をはなれす轡虫
二つ來て死を爭ふや火取虫
人は諂らひに道ひを失ひ菊はつくられて隱逸を失ふ
菊の花も哀は人に似るものか

明治元年六月沒す年七十三

○葛山五雀の美談

五雀は武藏國南豐島郡落合村泰雲寺住職名は大瓦葛山は葛山十郎の末葛山了然尼の法末なれは也了然尼は東福門院の官女埋木といふ人なりしか后宮葬御の後町へ下り晩翠といふ醫の妻となる男子三人を產は女の役足れり其上は必暇を給れかしと約して嫁す如約終て後江戸に下り原庭の鐵牛和尚の弟子にならんとせしに不免又駒込の白翁和尚に對面して可責を請ふ白翁見て不免婦人の寺門に出入せん事世間に對して憚あり然して佛門に入らんとする者容儀を整ふへき所以なしと堅く誡めて寺門を拂はれけれは無餘儀門前に出茶屋に休み十能を火中に燒て是を以て面皮を燒詩を作り歌をよみて白翁の門に入る事を免さる是則泰雲寺開基了然尼五雀其法末にありて貧寺を維持

し其行を正うす。傍俳諧を好み。能門徒を誘導す、又空也念佛の導師たり。其終るに及んで。遺言して曰。吾神國に靈魂降て則神國の人民たり。然るを僅六歳計の頃より。佛徒に養はれて生涯無事たり。又二十餘歳より。西馬の門に入て。俳諧を嗜み。是が爲に交りを廣くし。人の信を得たるも少からす。又二十四五年以來。空也念佛の導師となり。又人の尊崇を得たり故に同派の者の志しも捨かたき處あれは。先吾死したらは。同宗の僧侶を集め。宗法の作法を行ひ。以て生涯の名殘とす。會送は空也派の者に委ね。泰雲寺まて送りて。名殘の念佛を行はしめ。いよ〳〵佛縁を拂ひ退て。神國に降誕したる靈魂に立戻れは。神國の式を以て麗しく。神々しく。祝詞をよみ。歸天なさしめてよと。懇切に依託し外金拾圓除きて。同門及門弟等が句をすり物にして。生前の知己に頒ちてよと。殘る處なくいひ終りて三日許にして。化野の露と消え給ひたり。明治二十三年八月年七十

七古今無類淡泊なる事。了然尼の法末を穢さゝる大德といふへし

空也念佛會にて

秋去らぬ顔の揃ひて鉢叩き

思處

碁柿やなくて叶はぬ物の數

花の彌生こゝろの駒の狂ひ鳥

こほし行人のなつかし花の塵

朝起を先第一の夏行かな

筆よりもこゝろに任す夏書哉

此外感する句多かれと略す

○秋山御風の美談

御風は。秋田藩士。名は卯吉。郡奉行たり。繁務にありて俳諧を措かす權職

にありて下を輕しめず。共に交りて。俳諧の師弟となる。是則秋田正風の基する處。故に素山。陰風二葉。撫泉等の名家を出す。以て方今。國中正風俳諧の行はるゝは。出羽の國なり

老の名の立春なから待れ鳥
病後　盃も手にとるからに月涼し

慶應二年正月二十六日沒す年七十三。號應齋又俳聖堂

○稻田鳳棲の美談

鳳棲は。阿波の德島の藩士。家老職。通稱稻田筑後。鳳朗門人。俳諧の有益を悟りて。藩士に示す。故に當時上下俳諧をする者。百を以て算ふへし。江戸勤番にあたりては。御出入町人及御留守居などの見聞とて。北里南品などの遊覽もあらせらるれと。酒宴終りて。各自の部屋に入るを待。ひそかに同伴の俳人なとゝ共に歸りて其跡を見せす。或時百草村松連寺に遊ひて。麓なる岸某に宿る。各鮎の鱠又蓋燒なとゝ興しつゝ。醉酣にして。各かさま〳〵に倒れ臥たり。翌朝眼覺て。各不禮を詫。鳳棲子曰予も面白く打解たるかゆゑ。二三献過たれは。眠りて何も知らすとこたへ給へは。人々悅ひ調はさる發句なと。見せあひけるに。御句を乞へといまたといひて。見せ給はす。ひそかに西馬師の評を乞ひて書留たるを見れは

名月は峯もふもとも名なかり鳥
玉川のうら言葉なり鮎の澁

とあるを見て皆恥入たりとそ。此叟は身の行ひと共に句品を崩さす

永旅をひかるゝ馬や　青嵐

此叟かくれ給ひしは。安政のはしめにて其年月を不詳

○大越露光の美談

露光は。陸奥國田村郡田母神村の人。大越氏名祐泰以醫爲業同國白川郡上松川村に移居俳諧を好みて內藤露沾侯の門に入。侯日向の延岡へ轉封。後地方の正風を維持して。益侯の德を慕ふ。享保十八年露沾侯逝去。後獨立。天明三年。天下大飢餓す。藥禮を報ずる者なし。當主祐甫困難に沈む。時に先生八十歲。祐甫等男子三人あり。又女子を產む。此飢饉の中に此女子を養ふ爲に。大老に十分ならさる事ありては。不孝の罪免れす。寧此女子を返すに如かすと。老人是を密に聞とりて。曰醫は仁術なり。他人をすら助るにあらすや。況吾孫をや。八十歲の老人を勞るか爲に。生先永き產みの孫を返さん事甚不定理の至り也。吾是を聞て何ぞ汝等か至孝に甘むす可きや。是事を知る上は餘りなき。吾命速か切腹せんといひ給へは家內一同涙を流し。斯老人にあらはるゝ上は。三度の食を二度に減するとも。是非なしとて。取上て養ふ事となれは。老人是を號るに四とす十二支の四目なり。又兄弟の四人目なり。此よつ。九十三才にて沒する時。其血を分てる子孫彥玄孫等にて五十四人。一時の究迫に是をなみせは。五十四人の根を斷にあり。老人の一言後世ます〳〵尊きを知れり其發句に

ちる時にちるも哀ぞ露の玉

鞍置は馬もよろこふさくら哉

てら〳〵と日は差なから秋の風

吾里は丁度松魚の夜明かな

號橘井軒又靈嶽

天明四年七月九日沒す年八十一

○野木右通の美談

右通は。陸奥國白川郡。竹貫驛の人。野木氏。通稱清助實は。上松川村。鈴木金藏の長男幼より和歌を好み書を善す。十二三にして普通文に達し公用を辨して父を補く。人是を奇童とす。長するに隨て俳諧を嗜み一具庵一具の門に入。又書を水戸の日歡先生に學ふ。野木氏を嗣て庄屋に擧らる又塙支配の惣代庄屋を勤る事十餘年。會津。二本松。白川三家に。食鹽を納む。運送の辨を圖りて。牛數百頭を飼ひて。是を常陸の平潟港より往復なさしむ。其掛役の爲に一回失敗す。故に養家不平にして。挽回する能はす。先生罪を身に歸して不擧動學校をおこして。勞を養ふ。友人事を發して先生を擧むことを圖れとも敢て出す

葬や根にもとりてもひと盛り

かうすれは元日安し草の庵

是介堂と號す。又圓月軒文久三年二月廿四日。病て死す時に五十歳

辭世　木のもとの肥しともなれ花の主

とよみ紙を上に引張せ。仰に寢なから是を書終りて。また何とか書たしといひつゝ息絶えたりとぞ

○永沼光許の美談

光許は。磐城國石川郡。湯郷渡村の人。永沼氏通稱賴母。實は白川郡上松川村鈴木金藏の三男。永沼重壽の養子。始め幸四郎。又外記。維新後百官を禁するによつて。東百官に改めて賴母とす。劔道は中西忠兵衛門弟にて小野派一刀流の皆傳を得又易學を土御門家の御直弟となる。又千切鎌といふ鎌術を發明すと。門人數百名に及ふ。性義に強く情に厚し。鄉村の爲には。費用を惜ます。日を消滅せしも幾はくを知らす。親族中皆伯父々々と唱へて。萬事依賴せさるなし。故に地方。頑固なる風儀を破りよく人を

和さしむる標準となれり。先生常に吟する處の句も。只思ふ處なり

咲たれはみな能枝よ梅の花

物ことゝもかう纏めたしふ二の山

歸農士族

花ちりて同し若はと成にけり

近からす又遠からす門柳

隔つほと尙身にしむや鹿の聲

落ついて春待さまや雪の松

此人の行ひ是を見て知るに足るへし。常に人を度すを心とし。話を好みてよく乘するを知り。日の暮るゝを知らす。夜の更るを知らす

明治二十一年七月〇〇〇沒年六十

〇河田寄三の美談

寄三は。武藏國。榛澤郡。中瀨河岸の人。河田氏名は甚兵衛。實は齋藤南々の弟。河田氏を繼けり。若きより俳諧を好み。可布庵逸淵の高弟。上武兩國の俳士に率先して正風を弘む。其表は柔弱にして。能豪强を制するの沈勇あり同國の內にも。他門の風士ありて。豪强に誇るといへとも。敢て容れす。逸淵翁曰。寄三は吾門俳諧の城郭なりと又西馬翁曰。寄三大人は自柔弱なりと決定する故に。飽まて强し。吾いまた不及處なり

安產の句を乞はれて

玉苗やよい月星の守り神

入學する者に示す

一葉より起る野山のにしき哉

留別

ふりむけは乘おちけり霧の笠

粟津の祖廟にて

椎の實を鳥もはこふや塚の前

此度伊香保より安中の牧雄子へ送りたる手紙ありて。肉筆を板に彫て追善會に配りたりしか。草庵類燒の爲失ひたり先其あらましは

此間伊香保入浴の爲參候處平年とちがひ相應不致候樣相覺え候間高崎まて引かへし。養生可致と存候得共。一日增に氣力相衰へ候に付。多分是は生涯の名殘と存候。愚察間違ひはなきつもりなから。煎豆に花と申事も御座候得は。若再會の幸へを得は。此上もなき仕合先現狀のあらましを進置候匆々頓首

九月　日不詳　　寄三

牧雄雅兄

いつよりも眼に立に鳥露の玉

此外二句計ありしと覺ゆ

寄三翁の句中。人口に膾炙して一日も忘るゝあたはさる句は

日の出より月の入るまて春の海

吹かぬ日もつのる斗そ秋の風

此度の著　去來伊勢紀行丈草寐轉草○七部集連句早見○南々發句集

附文女發句集○寄三發句集　是は挾合笳言幹雄

明治五年九月十九日沒す年六十六

○永井一朗の美談

一朗は。上野國。西群馬郡。伊香保の人。永井氏通稱喜右衛門。伊香保十二の長者なり。性健立强毅常に農桑を怠らす山獵に長じたり。朝山に入らん

とする時。大椀にて飯十杯汁六杯素湯七八杯を呑立出るに。中飯の用意なし。夕に戻りて又飯六杯。汁四杯。川魚十串位喰ひて。又素湯四五杯のみ。間に物喰はす。何故に斯ぞと問。先生答へて云。食は習慣なり。猥に是を飲食すれは。山に出る能はす。我山獵中澤に至りて。水ありとも決して呑す是を呑て渇を凌けは。山上に至りて又渇し來る。此時凌くに堪へす。元より身躰は養ふ丈の物を飲食すれば。時々刻々にせすとも。必枯槁するの愁ある事なし。終日山中を歩行し傑然として緩ます。夜に入て。句をよみ連句とす。終夜眴かす。眼光王戎の眼に等し。能山野の事を明かにし。又人事に委し又十二戸の長心中に恐るゝ處あり。總て實地を研窮して馬琴。青藍なと歳事記を可とせす

泥足を椽に並へてひる寐かな
今日は巣にもり上り鳥燕の子

解る日はこゝろも付かぬ氷哉
夏菊や是も暮まつものゝかゞ
晝顔や日の岡こゆる弱法師
砂壁のよれはこほれて秋寒し
掃雲樓と號す。大江佳賢。字桂林

明治三年八月二日沒す年五十餘

○中澤笳言の美談

笳言は。上毛那波郡。今村の人。中澤氏。通稱新右衛門。西馬門人。發句連句共に妙を得て思邪なきに至る。故に一句腮を解ものあり。一句泪をこほさしむる物あり。能山翁漁者といへとも。此叟の句を悅はさるものなし。又老婆少女に聞ゆる句をして。自嬉しとす。論者あつて。可否を論す。只管己

か句の否に陷るも對して爭はず。能郷中の人を和さしめて。人の功となし。適和さゝる者あれは。是を已か罪とす。當主中澤三郎。區長に撰まる。伊勢太神宮の玉串縣廳より渡され。是を戸長に頒つ。村内に是を拒むものあり。老人是を聞てひそかに。其者の家に到り。其方は此玉串を受すとかや是は伊勢の太神の御靈主なり。昔より予か役をする頃是を受さる物なし。汝維新以來其價の定りて高直と思ふならは。吾内々白米三升つゝ添へて遣すべし。是を汝か受されば。他の響きにもなるべしといはれて。貧民等一言半句もなく。ずら〳〵と受たりとぞ。是は他村の戸長の咄しにて。聞たるを書留めたり。是等にても其人物は察して知るへし其句にいふ

菊の花かくして切て呉にけり
麺棒を出して勸むる蜜寮かな

孫か乳母居もせぬ螢呼歩行く
ちさいのは死すも是非なし火蛾

明治十一年　　沒年七十

○角田文河の實談

文河は上毛那波郡。上福島村の人。角田氏名は八郎。古今の教へを氣臆し俳席の擧動を嚴かにす。又發句連句の吟聲梁上の塵を舞はすへし。此畏口を開けは。必人を服せしむ。此畏席に着けは必衆人膝を繕ふ。是則師の任に足るものといふへし

夜も春にして仕舞けり梅の花
竹の子の今朝も一節はこひ鳥
一葉二は果ては算へもせさり鳥

是程の强みを持て女郎花

明治二十四年　沒す

○大森香芸の美談

香芸は甲斐國都留郡境村千福院の住僧にして大森氏名太癡。才氣凜々として。容貌ゆたかなり。俗中風雅の趣味ありて。人に高尚なる觀念を抱かしむ。俳諧の交はりは。僧にあらす。俗にあらす。なとゝ詞を和らけ。供に〳〵其域に至らしむる策をめぐらし。交りは且徒の。外を自在にす。維新後越前永平管長の隨行して實功を擧。東山梨郡。永平寺直末永昌院へ轉住說教も。俳諧を以て輔け。俳諧も宗教を以て弘む。與奪自在の知識と云ふべし

永祖其昔入宋の時を感して

春寒し思ひ筑紫の博多船

時鳥寐覺々〳〵のちからかな

急かれは油斷も見えす蝸牛

明治十四年沒月日不祥年五十餘

○野口有柳の美談

有柳は。武藏入間郡。川角村の人。野口氏名は祐助。九世。春秋庵よく農桑に力を盡し。俳諧を專にす。地方に會ある時は。風雨を論せす。草鞋を履杖を付て數里を遠しとせす。春秋庵をして再面を起さしむ。今年の四月末。武藏野支會を開行の序書をおくりて。庵中に廻ん事を乞ふ。予訪ひて。老人の病ひを伺ふに。事なしといへとも。春秋庵は當派貴重の庵號にして。不德の者の手に陷なは。當派の不名譽。老か失策とならんもいとわりなし。

若萬一の事有之に於ては是非々々。會長自嗣改て當連至當の者へ譲り給へと社中の人々立合にて。依頼の證書を。予に託したり。いつれ秋にもなりたらは迎て別れたりしか。七月七日死去せり先生みつから認たる訃音着せり。不思議に思ひ是を仔見認るに。表面及文面は當人にて。月日刻限丈手跡も違ひ墨色も異なれは。後より書入たるものゝ如し。死るまて中々風致ある行ひなりと。八々感しあへり。常の行ひも亦是にひとしけれは。句も曲ありて感深し

春秋や赤半天も肩に瘤
蓑むしといふ隣あり蝸牛
門番のひらいてわたす日傘哉
寐過した氣持を直す新茶哉
風の道の直にふさかる茂り哉

明治廿六年七月七日沒年八十五

○新井角丈の美談

角丈は。武藏の國入間郡津久根村の人。新井氏名○○能忙怱の中にあつて俳諧を措す。俳席を別に設て俗事に混せす。風雅の内に嚴なる處を有して。道を尊ふの信者たり。故に子孫に至るまて。俳諧を嗜み村童を誘導す。斯れは妻嫁。下婢に至るまて。其友人を扱ふに切なり

此國に於て死せし者は。此畏率先して。年會を營み句碑を建德を銘す

巣に着て身の細うなる乙鳥哉
梅の花さりとて若き匂ひかな
山里や何を焚にも蚊やり草
百合咲て明ほのつくる籠哉

耳鳴の折角やめは閑子鳥

明治十七年〇〇〇〇沒す年六十餘

〇福永四端の美談

四端は淺野家の藩士福永小太夫。大廣間留守居役二老に至る。繁務いふへからさる中に。俳諧をたしなみ。風雅の交りを厚うす。西馬門人

眠い時寐る身持たき四月かな

此人四十二萬石の表役にして。聊も私に過べからす。實以此句感深し

〇鈴木左竹の美談

左竹は仙臺領。亘理郡亘理町の人。鈴木氏。通稱重郎右衛門。母に仕へて至孝なり。西馬門人よく風雅の交りを廣うす。呉服商にして。年に二度つゝ

江戸へ往復す。ある時下總古河の並木にて

明本のや麥のうへなる筑波山

筑波山は。方百里の平地に突出して。紫の筑波山と唱ふ。誠に春の明ほのゝけしき。渺々たる海上の如くなる青麥の上にあらはれたる。實に上五文字活きありて。いと〳〵ゆかし。　此叟維新後沒したり年六十餘

〇服部棄地の美談

棄地は。尾州名古屋在下の市村。服部氏通稱林右衛門。梅裡と名を同しうすといへとも。氣發にして妙ありある時句評を乞ふに

茶一はいのめは遁るゝ時雨哉　　幹雄

木の葉降音や朝日のてら〳〵と　　同

冬の夜や物くふ音の淺間しき　　同

此三句を拔萃して曰。子は江戸に住みて。江戸の風にあらす。是を貫かん事餘程骨折なるへけれと。敵は却て勵の力になるものなれは。力に屈せさる樣いたしたし。是予か微意なりといひこし給ぬる後。間もなく死したりと聞。實にをしむへき器ものなり

空も今朝奇麗にはれて梨の花
鳴かすとも水鷄の夜なり池の雨
名月や膝と並へし硯箱

此叟の人品句もても見るに足れり。をしむべし我一面識なしといへと五十に足らすして沒せしとそ

○鈴木天由の美談

天由は。武藏國荏原郡用土村の人。豪農醬油造及質を業とす。芝區櫻田備前町より。相州浦賀まて。出店十三戸。月々二十五日より出店をめくりて。調へをおこそかにす。傍風雅を嗜。心にまかせて句を作るをたのしとす。敢て高名たらん事を欲せす

人真似をせねはひまなり三ヶ日
誠なら迷惑なならむ懸想文
腹に實のないやうに浮く蛙哉

此人の安心此發句にて見るに足れり。維新前に死せり年七十餘也

○淺見野井の美談

野井は。武藏國入間郡中神村の人。淺見忠兵衛の父。若うして家を出。俳諧に身を任す。始は狂歌をよみて名を音よしといひ。可布庵逸淵の門に入一度は蝦夷地に遊ひ。或は長崎に遊ふ。正風俳諧を弘るに當ては一歩も

人に遜らす。已頑固の字を得たり。一回江戸本町二丁目に紙葉軒を開き。古郷にかへりて。逃水庵を發せり。地方正風俳諧の交りは。此叟よりをしへたり。故に其餘風あり。此あたり大に隆盛なり

思ひ入こゝろの奥ぞ枯尾花

逃水庵開業の頃にや

蹈折た鹿相と佗す花すみれ

行燈を消してこたへる寒さ哉

此句豪氣を見るに足るへし。武藏野、正風中興の祖たり

明治九年四月沒す年六十三

○遠山弘湖の美談

弘湖は。江戸白銀町四丁目に生る。父は上總國周淮郡の人。搗米渡世なり

幼名忠吉。落語家の門に入。噺家忠吉といふ。後可布庵逸淵の門に入。俳諧を學ひ。弘湖といふ。事淡泊にして。人に愛せらる。愛に從て己を忘れ。月日を忘る。發句連句に至ては。吾吾をわすれて。奇を吐妙を出す。人に腮を解かしむる事を常とせり。よく、草木の花實を愛す。故に其句案外に出

活こぼす莟みのみけり梅の花

喰ふも惜くはぬも惜し栗一ッ

神田新石町に住みける頃。朝湯に入て戻らんとするに。不圖龜井戸の梅を思ひ出し。朝餉も喰はす。往けるに。途中にて食事せんとするも。嚢中はおろか。嚢ひとつ持す出けれと。流石。ひだるふりもせす。梅を見歩行けれは。先生一ッ如何なと盃をさゝれ。おつと頂戴なと。面白う飲けれは。其客か木母寺の植半に同道せよと。御内儀及御令女迄。先生々々と囃されて。終に郭巨の釜掘といふ踊をすれは。是は奇なり妙なりとて。又屋根船に

のせて。其宅まで行。飲倒れて。翌朝見れは何か御用達なとの樣子にて。立派な家なれと。昨日より厚き御馳走に成。又御宿まて參り。いまた名も承たまらぬは。今さら何と申ますといふもいとはつかしく

手紙には何と書へし梅の宿

主大に悅ひて。門人になりしと云。又可布庵老人の庵裡たる時。月一二度つゝ佗人をたのみ歸る事を得。皆酒の爲なれは。敢咎る罪もなし。老人曰「弘湖汝か當庵に居る事何年に成ぞ」「はい六年に相成ます」其内三年は不首尾の月日ならん。最早佗言頼まん人も盡たるへし。予も亦佗人に對し同し事いはんも心苦し。以來は不首尾の筋をみつからいひ來るへし。予も聞くに安しといへは湖云何卒相對に願ひますと

元日も半日出來つ　佗　濟て

維新以來庵を廢して九州に遊ふ事七八年。更に音信あらされは遠山金治郎籍を除きて無籍人となる。日本橋十四小區へ官許の無籍を願ひ出たれは。小區の戸籍掛り。星野氏は舊檜物町の名主にて。知る人なれは。遠山金治郎を呼出して。入籍を願はせ。明倫社寄留にて遊歷し武藏比企郡。熊井村。雪暎と云者の家にて死す。此叟發句連句とも正しけれと。酒に耽りて人の嫌ひを辨ふ能はす。故に野宿を好みて堂宮に臥事をいとはす。武藏國入間郡大類の野中なる宮を見るに

とう寐ても呵り人のなく風凉し

弘湖と書てあり一茶惟然とも違ひてをかし

○兒玉逸淵の美談

逸淵は。武藏國兒玉郡八幡山町の人。碩布門人。上毛高崎に住し。後江戸神田紺屋町に轉す。始め可布といひ。後可布翁逸淵と云。二十二三歲より東

西南北に修行し常に節儉を旨として門人を養ふをいとはす三四人宛常に居れり或時東海道にて須磨の西月と同宿す夜既に天明に至る頃肌帶一本にてむくと起用所に行にやと見居たるに行燈を消して又元の如く床に入て寐入たり此時西月は四十餘可布は二十四五のとしなりと此叟還暦のとし西月より贈りたる文に此事を書て吾其時は何心なく見過せしか此大家をなしたるにて思ひめくらせは元より氣高き心のありし事思ひ當れり云々門人に西馬半湖野井弘湖洒雄浪分松室銀岱業にせさるものは南々寄三文女可考逸夫心足竹山等の高名家あり別に嚴重の教へをなすにもあらす只能人を和さしめて知らす〳〵進ませしなり六十六歳にして武藏本庄驛に引込老を養ひけるに又上毛武藏の門人等集ひて老のいとまあらす されと年〻江戸へも出湯治にも保養して他の俳人の如くあくせくせさるなり二度目の妻連女に

與六といふ男子あり それか四ツ計の時連女の沒しけれは

花と葉のためにみたるゝ野萩哉

此句も人こうかと聞居たるも今更思ひめくらせは各自の身の上也又

草の芽は蹈まれ木の芽は摘れ鳥

世の中の姿情は斯一句にもこもる物かと人〻感しあへり

子に親のぬれ羽かふせる乙鳥哉

あらそふも遲るもあるや花の蔭

蝶の羽を襲ふや斧の遠ひゝき

海山に住よくのなき蛙かな

龜の住む瀨もとし月は流れ鳥

蜂の巣やつかぬ尾上の鐘の中

是等の發句を見ても此老人の凡ならさるを知るへし されと當時は流

行々とて。人受あしかりしなり。瓢椿を愛して。瓢隠居。椿老人などの號あり。門人及婦女子に至るまて。能教育の話を説きかせて。自樂しとす

文久元年七月二十日本庄驛に於て沒す見玉郡見玉本町東光山玉蓮寺に葬る

○富處西馬の美談

西馬は。上毛高崎の人。富處忠兵衛(俊臣)の男幼名。豐次郎。伯母。志倉氏の養子となる。其家は左官の頭立たり。伯母孀なるを以て。擔當者あり。是に從て塲所〳〵に出るに。他の者と異なり。十五六より俳諧を好みて。可布の門に入。其職を仕舞ひ。夜〴〵湯錢五文を持て可布のもとに至り。行燈の油皿に湯錢をのせ。俳諧七部集を見なから寐入て湯に行を忘る。終に行燈の上に溜りたる湯錢二百七拾文。可布師の妻百文を足して。七部集一部

を買ひて與ふ。夫より左官の手傳にいつるにも。彼七部集を懐にし。外職人の休む毎。藏の間又は物の蔭なとに入て。是をよむ。斯する事三四年にして。いよ〳〵。俳諧師にならん事をのそむ。伯母の免しを得て。可布庵に入熟し左官を罷む。時に年十九元より學術なきかゆゑに。醫者或は菩提所の和尚等に近付。何學となく勉勵し。普通の俳人になりしは。二十四五の歳なり。上信武三ケ國をめくる事。年に兩三回。二十八歳の年。可布庵逸淵江戸に出る。跡の妻レンと二人高崎にのこり。其頃俳名樗道といふ。可布庵高崎引拂ひとなり。年三十始獨立して。毛軒西馬と改む。天下高崎の西馬といはるゝに至る年三十六。祖翁百五十回忌にて粟津に上る此年高崎大火毛軒類燒及伯母病て死す。當時先生阿波の小松島に居る。聞之速かに下向し伯母の本葬をし。毛軒を再興す。弘化元年三十八。松島にて薙髪。端巖寺和尚。稱て自喚居士とす

松島に眼こゝろの欲はなれ鳥

弘化三年三十九。始て江戸新橋宗十郎町に。菴を開き惺菴西馬と云。鳳朗門人悉く西馬による

欄干や誰か手をもれてぬれ扇

海苔に砂なき迄に世は開け鳬

鷺や　毎日聲につかはるゝ

是等の句を以て。時の人氣皆西馬に寄もの多し。門前市をなせり

八九間流れて沈む木の葉哉

稍にはなくて流るゝ木の葉哉

池半とけて日を經る氷かな

勝手にも半輪見ゆる牡丹かな

かゝる新らしみにて。人心を奪はる。西馬師の新らしみ眞情より出て。人

と言葉を分つ。大沼枕山云。西馬の句。杜子美也と。又再案に長したるを恐る。或時門人等集ひて句案す時に

君か世や春を忘れし鴈の顔

といふ句を人々善とす。幹雄獨いまた悅はす。師問汝には聞えすや。雄答へ云聞えたり。他人なれはよし先生の句にては受すと云。翌日

月さすや春を忘れし鴈のかほ

と再案したり。上五文字。理を離れ風姿をなして。目前にあるか如し。又

苗買うて今日より菊の主かな

といふ句を作れり。初心の句に○鉢植を買うても梅の主哉といふ句あり。と傍より咎められて

悠然見南山

苗買うて今日より菊の籬かな

と再案したり。前案は理なり。是を籬に移して。陶淵明か寂を慕ふ。氣韻前案に十倍せり

悠然見南山

垣こしや遠山かけて菊日和

此句幹雄か前年の句にありといへは。只默して居たりしか。是なれは汝か句に如何と。書て出したるを見れは

山遠き北まて晴て菊のはな

吾見てはつと驚き。句案のし方を。此時はしめて自得したり。西馬師は常に無言。筆をとり言を述るに至ては。實に湧くか如し流るゝか如し

安政二乙卯年十月二日大地震の夜隣町に火事起り師と我と屋上に上り。火の粉を防き居るに。幾度となく。震ひ來て。屋根に打臥て凌く程なりしか日我に句ありと

安政丁卯年神無月二日の夜。大地震ふるひて。天地涙をよせるか如く。

火事は。八方におこりて。焰屋上にせまらんとす。悲しみ叫ふ人聲耳をつらぬき肝に銘し。火事も地震も一時に鎮め給へと出雲の方を伏拜みて

いさ神ももとらせ給へ旅二日

火の粉頭巾に燃えぬけ。袖にすかる中に。此句を唱へて我に授。是に脇句せんとたゆたふ内。火はます〳〵つよく。烟り眼口に入て堪へかたけれは隣家の左官由公といふ男。生大根壹本を下よりやねへ打上て是を口に陰へて居れは。烟りにむせすといふ。かゝる仕合なれは終に脇句も得附す終りぬ

門人に。幻亜。素明。蕭道。均外。白亥。五雀。月杵。幹雄。又業とせざる有名家四端笳言。一朗。文河。可山。牧雄。左竹。呉羊。此外もれたるも多かるべし

辭世　名月の方へころはすまくら哉

安政五年八月十五日沒す年五十一

編者云此句辭世にはあらず。病中月を見むと思ひし發句なり。されは名月のかたへ進むる枕かなといふべきをころはす枕哉と作りしは臨終の吟にして。おのつからいひ當たるものといふべし

附言

俳諧名譽談は奇人談及畸人傳又は諸書に著明なる者。又は俳談に出て人口膾炙する者。又は實地篇者に交りて氣臆する者。總て美談に渉る物どもを書集めて。著すといへとも。始より美目の顯れたるもまれなれは。先古今の俳士の名を擧て。其中より美談ある者を。拔萃して。編纂すれは未其話もなく。句も通常にして取能はさる者半あり。必是美事なきにはあらす。未其書を閲せす。其話しに觸さるなり。故其洩たる雅名を。茲に擧て職者の補を請。又徐々と問もとめて。後篇に著すへし。其交り深き人又何かの關係ありし人にあらされは。其美事も其奇事も。知るあたはされは直接に間接に此事を補へかしと。左に名稱をあらはし置になん

西京 ○岱年 ○有節 ○梅通 ○芹舍 ○九起
○公成 ○默池 ○文海 ○杜鳴 ○祭魚
○丈翠 ○島岳 ○漁藻 ○淡節 ○碩水
大坂 ○萬和 ○月居 ○淡叟 ○奇淵 ○鼎左
○素屋 ○林曹 ○公眠 ○蟻兄 ○潮水
○其山 ○流美 ○西月
播磨 ○木海 ○可大 ○古谷
阿波 ○露白 ○芳節 ○瓢鯰 ○麥鳥 ○茶雷
○萬像 ○直躬

讃岐○天蓁
土佐○雲外○素鳳○嵐夕○元史○娚牛
伊豫○鶯居○菊圃女○棹舟○其戎○牢窓
薩摩○鐵冠○馬翁○桃戴
日向○雙烏○駝岳
豐後○乙人
肥前○雨兩○寸長○いはほ○止行○一化
○文旨
肥後○青年○十虎
對馬○艦笠○馬雪
安藝○篤老○閣陵○甘古○梅鬼○三車
石見○青池

周防○素兄
長門○得齋
因幡○一樹
丹波○湧瀧
丹後○烟笥子
紀伊○閑那○黍丘
近江○月坡○乙也○蜩山○蟻道
越前○布珀
加賀○大夢○柳壺○木圭○雪袋○晴江
能登○寒崖
越中○如兮○慶里
越後○春室○乙瓦○市猿○契史○吏川

○茶山○鷺眠○雪潮○李朗○古棠
遊古○清水○白鷗
佐渡○有翠○西塢○霞昇○月滾○斧刪
美濃○沽圃○馬莧○里圃○竹苗
尾張○塊翁○岳輅○羅城○松兄○沙鷗
伊勢○楞頁○椿堂○月底○梅裡
而后○士前
參河○積翠○水竹○完伍○塞馬
遠江○烏谷○壯水○嵐牛
駿河○漣山○かつらめ
甲斐○蟹守○雲里○可轉○漫々○竹應
○竹外○星氷○椿年

信濃○若人○河丸○葛古○一之○銀岱
上野○心足○逸英○可厚○木芝○月叟
○光同○幻亞○壺國○足了○椿翁
○半海○牧雄○眞葛○漁友○木公
○米實○心星○見左
伊豆○士敬○松烏○風子
相摸○故崖○立宇○宣頂○丹堂○榎堂
○觀堂○布丈○蕉岱○月鍼○如々
○亭々
安房○買風○季民○延年
上總○由儀○風乎○景文○癸白○他山
○呼牛○音人○羽人○素齋

下總
○恒丸
○江月
○太節
○以兄
○梅麿

常陸
○國女
○稚麥
○鶴翁

○方居
○野巢
○さち丸
○杜年
○規外

磐城
○由人
○乙丸
○佛孫
○清素
○志風

岩代
○東里
○六槐
○遲阿
○精器
○菜史

陸前
○舍用
○心阿
○柳志
○江三
○任阿

陸中
○此一
○沙山
○平角
○素鄉

羽後
○五明
○素山
○二葉
○桂偈
○夏靜

羽前
○清風
○二丘
○璥山
○月山

松前
○旭
○其山
○一鼎

函館
○布席
○草居
○車來

武藏
○南々
○溪齋
○五渡
○青圃
○照阿

○五八九
○青荷
○市月
○龜成
○月雄

○涼花
○梅年
○知泰
○泰眠
○松什

○竹城
○完鴎
○涼坪
○東阜
○太郎彦

東京
○寥松
○完來
○禾葉
○宜麥
○對山

○抱義
○卓郎
○氷壺
○祖鄉
○得蕪

○由誓
○了知
○惟草
○山外
○念々

○月ふる
○可尊
○見外
○等栽
○無湖

○貫乎
○蘆城
○鳥吟
○菊雄
○萬古

○不染
○千兮
○北因
○孤月
○吳仙

○爲山

○此外奇人談などにあるも洩らし置物あるは後篇の飾りとするものもあり又其外の古人の調べも後篇に入必右の名稱のみにはあらずとまるべし

編者　三森幹雄述

俳諧名譽談終

明治廿六年九月十一日印刷
明治廿六年九月十四日發行

定價金廿六錢

發行者　東京市芝區愛宕町二丁目十四番地　手塚猛昌
著作者　東京市日本橋區蠣殼町二丁目四番地　三森幹雄
印刷者　東京市京橋區八官町十七番地　三谷百造
發行所　東京市京橋區八官町十七番地　庚寅新誌社
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍

版權所有

●佐藤寛先生著

九月五日發兌●製本美麗●紙數六百頁餘●全部貳冊●定價金五拾錢●郵税拾錢●郵券代用二割增

ゐろは文範

一筆染じゐろは上巻の目錄は●ゐろは文の模範●ゐろは文の種類（十二）●ゐろは文の作法（八）●ゐろは文の作例（廿四）●ゐろは文の書法（十八）

あらゆる如此にして目出度しゐろは

下巻目錄●右大將道綱母●紫式部●赤染衛門●大貳三位●俊寛僧都女●翠黛●平政子●越部禪尼●阿佛尼●松下禪尼●一休和尚母●高台院●小野寺千●小少將●木村重成室●小野阿通●はうせう院●堀ろくこ●石井高尾●佐々木照元●陵嚼吧春子●武林唯七母●原忠右衛門母●瓜園百合●岡本美地●鶏殿より子●弓屋俠文子●瀬川太夫●きせ子●馬場存義母●荷田春生子●松尾政子●三宅藤子●山口藤子●するが●靜寛院宮●柯内秩子●徳川演芳院

東京大賣捌所

東京市京橋區尾張町二丁目　東海堂
東京市神田區表神保町　東京堂
東京市神田區錦町三丁目　武藏屋
東京市日本橋區通一丁目　大倉書店
東京市京橋區彌左衛門町　巖々堂

關西一手大賣捌所

大坂市東區備後町四丁目　梅原龜七

東京大賣捌所
東京市京橋區尾張町二丁目　東海堂
東京市神田區表神保町　東京堂
東京市神田區錦町三丁目　武藏屋
東京市日本橋區通一丁目　大倉書店
東京市京橋區彌左衛門町　巖々堂

關西一手大賣捌所
大坂市東區備後町四丁目　梅原龜七

●佐藤寛先生著■九月五日發兌●製本美麗●紙數六百頁餘●全部貳冊●定價金五拾錢●郵稅拾錢●郵券代用一割增

文範

一筆染し上巻の目錄は文の變遷文の總論文の種類(十二)文の作法(八)文の作例(廿四)文の書法(十八)あらゝ如此にして目出度し

下巻目錄●右大將道綱母●紫式部●赤染衛門●大貳三位●俊寛僧都女●袈裟●平政子●越部禪尼●阿佛尼●松下禪尼●一休和尚母●高台院●小野菊子●小少將●木村重成室●小野阿通●ほうせう院●堀ろく子●石井高尾●佐々木照元●咬嚙吧春子●武林唯七母●原惣右衛門母●祇園百合●岡本美地●鵜殿より子●弓屋倭文子●瀨川太夫●きせ子●馬場存義母●荷田蒼生子●松尾政子●三宅融子●山口藤子●するが●靜寛院宮●河内荻子●德川貞芳院

伯爵副島種臣先生題言
羯南陸　實先生序文
鐵蕉中原邦平先生著述

全一冊四六形紙數二百頁餘
代價金貳拾六錢
遞送料金四錢

日清露之關係

夙に發憤して露語國に精通したる中原先生東洋多事の今日此著豈止を得んや、陸先生序して曰く露國南下の發端より其大勢を叙し然る後日清の關係に及ぼし次序頗る其宜を得たり加之考據精確叙事簡明一讀して三國の形勢心目の間に瞭然たるを覺ゆと、副島伯題して曰く昔者辟國日百里今也盛國日百里茲事入誰感嘗以問焉と、更に喋々を要せず

小幡篤次郎先生序文　佐藤寛先生編纂

名家手簡 小文範 上下二冊 全

第四版　紙數六百八十頁
全部二冊　定價金五十錢　郵送料金拾錢

本書は師範學校中學校高等小學校等の教員諸氏か生徒に小文を教授する參考書たるは固より何人も一たひ之を繙かは文思躍出筆力縱横なるべし且つ徳川氏三百年間社會の狀態一々之れを掌に指すかことくなれは亦以て一部の歴史となすへし茲に本書載する所の英雄豪傑賢相忠臣碩儒高徳の名を掲くれは

●徳川家康●蜂須賀至鎮●伊達政宗●釋澤庵●中江藤樹●山井正雪●山鹿素行●内藤芝風●人見竹洞●徳川光國●大石良雄●大高子葉●伊藤仁齋●梨山潛鋒●瀧井其角●雨森芳洲●谷泰山●佐藤直方●新井白石●園女●狭生徂徠●室鳩巣●安積澹泊●小池桃洞●冷泉爲久●太宰春臺●土肥霞洲●服部南郭●加茂眞淵●宇佐美灌水●稲垣白嵐●稲生魚彦●片山兼山●馬場存義母●西山拙齋●林龜瑞●赤松滄洲●紀平洲●本居宣長●中井竹山●柴野栗山●皆川淇園●龜井南冥●賴春水●古賀精里●釋六如●後藤松陰●上杉鷹山●松平樂翁●北川眞顔●近藤正齋●賴山陽●賴杏坪●大江廣海●狩谷掖齋●宇津木靜庵●大鹽行紫●屋代弘賢●松岡辰方●渡邊華山●林述齋●香川景樹●高野長英●瀧澤馬琴●成島稼堂●江川坦庵●藤田東湖●深川鵬宇●阿部正弘●足代弘訓●佐藤一齋●梅田雲濱●三條實萬●賴鴨涯●本居内遠●吉田松陰●眞田遂翁●伊井直弼●徳川景山●菊池大麓●佐久間象山●岩瀬蟾洲●小林歌城●貫名海屋●會澤安●藤本鐵石●清川正明●鍋田晶山●平野國臣●齋藤拙堂●高島帆●家里松濤●河野鐵兜●青山延光●柏木忠俊●親子内親王●鷲津毅堂●大久保一翁●淺水樓碧●徳川慶喜（合計壹百名）

森槐南先生譯述

支那小說

水滸後傳

毎月一回十日發兌十八ヶ月にて完結
●壹部定價金九錢無遞送料●九冊前金七拾八錢●全部拾八冊前金壹圓五拾錢也

本書は古宋の遺民雁宕山樵が著にして水滸傳百二十回の後を受け趙宋の姦臣蔡京高俅等が爲めに寃を呑み恨を飲んで沒したる一百八人の中仍ほ生存せる混江龍李俊等が中原頽覆の大變に遭遇し之を匡救するの計合期せず已むなく風に乘じ涙を破り遥羅國に押渡りしに彼の國亦内亂あるに會ひ終に之を鎭平して其王位に陞り事實を主眼とす、彼の有名なる曲亭馬琴が弓張月の其の結構全く此の書に本づけり、其の間亦宋の君臣俱に醉夢の中に在りて天子北狩の辱を取りたる所由を明叙し涙子燕青が故君の恩を忘れずして徽宗皇帝を其の囚庭に訪問するの條の如き痛傑之人を途中に誅戮し其の屬に塡つるを覺えざらしむ、蔡高等の前局盡く翻りて諸豪は一讀痛涙の生肝を取りて水滸已故の英靈を祭る一段に至りては淋漓痛快、殊前傳以來無數の煩寃此に至りて始めて之を一吐す、其の妙言詞の盡す所非ず士如何に奇とす武威に震懾したりしかを窺ひ知るべし、斯る一大奇觀の一大小說を假名方交今我邦の國文の泰斗たる森槐南先生が運用自在の妙手靈腕を以て平大奇の普通文學界中詩文の何人と雖も之を讀み易からしめられたるものなれば覺えず一人を以て文を成し慷慨激烈の篇に至れば覺えず人をして嘘唏流涕せしめ悲壯淋漓の章に至れば覺えず一大奇觀中森羅萬像具有せざるなし其の他豪放、緻細、著勁、簡潔、雅に俗に一大學者の筆を以て目前の境に切齒扼腕せしめ故に本書を讀まば文氣を養ひ詩味を長ずるは無論方今國を學ぶの時に際しては其の士氣を鼓舞作興するに於て其の益たる婦人女子からざるべし沈淪に在るか如ぜるの時に際しては其の士氣を鼓舞作興するに於て其の益たる婦人女子からざるべし請ふ四方の君子發兌の日を待て續々購讀せられんことを

目次

第一回 阮統制梁山感舊 張幹辦湖泊尋災
第二回 毛孔目横呑海貨 顧大嫂直斬豪家
第三回 病尉遲間住遭殃 欒廷玉失機入夥
第四回 鬼臉兒寄書罹禍 趙玉娥衒色招奸
第五回 老管營蹇遭横死 撲天鵰寃被拘囚
第六回 飲馬川李應重興 虎峪寨處王鬪法
第七回 李頁嗣條陳賜姓 鐵叫子避難更名
第八回 萬柳庄玉貌招殃 寶帶橋節婦遇盜
第九回 混江龍賞雪受祥符 巴山蛇截湖徵重稅
第十回 墨吏賠錢受辱 豪紳斂賄傾家
第十一回 駕長風羣雄圖遠略 射鯨魚一箭顯家傳
第十二回 金鰲島開基珍暴 遮羅國被困和親
第十三回 救水厄天涯逢故友 換頁方相府藥雀人
第十四回 安太醫遭讒避跡 聞參謀高隱留賓
第十五回 大征戰耶律奔潰 小割裂企弓獻詩
第十六回 潯陽樓感舊題詩 柳塘灣除兇報怨
第十七回 穆春喋血雙峰廟 扈成計敗三路兵
第十八回 黄統制遭枉歸山 焦面鬼謀妻落井
第十九回 納平州玉麟招兵 逐強徒徐晟奪甲

第二十回　賈揚柳汪豹累呼延　失保定朱仝投飲馬
第二十一回　李應火燒萬慶寺　柴進仇陷滄州牢
第二十二回　破滄州義友重逢　因汴京奸臣遠竄
第二十三回　喪三軍將材離火宅　演六甲兒戲陷神京
第二十四回　献青子草野全忠　賄難人石交使義
第二十五回　折王進小乙逞雄談　救關勝大名施巧計
第二十六回　逢天巧荒殿延英　發地雷寺基殲賊
第二十七回　渡黄河叛臣顯戮　贈鴆酒奸黨凶終
第二十八回　横衝營良馬歸故主　鄆城店小盜識新英
第二十九回　還道村兵擒郭道士　絮髯伯義護美髯公
第三十回　聚登雲兩案朝宗　同泛海群雄鬬地
第三十一回　國主春遊逢羽客　共濤謀逆遇番僧
第三十二回　慶生辰龍舟觀競渡　築寶位綺席進霞丹
第三十三回　頭陀役鬼燒海舶　李俊誓志守孤城
第三十四回　大復仇二兒授首　議嗣統衆傑歸心
第三十五回　日本國興兵搆釁　青霓嶋煽亂殲兵
第三十六回　振國威勝算平三島　建奇功異物貢遐方
第三十七回　金鰲閣仙客留詩　牡蠣灘忠臣救駕
第三十八回　武行者僧房敘舊　宿大尉海國封王
第三十九回　丹霞宮三真終靜業　金鑾殿四美結良緣
第四十回　荐故觀燈同宴樂　賦詩演戲大團圓

主筆六石佐藤寛先生

作詩作文法

壹冊代價金八錢●全部拾二冊代價金九十六錢無遞送料

豫約之通拾貳卷全備

●文躰假名交り普通文●目次

日本文章新論

現今の文章の法則なく規律なき其の有様は頭は和文腹は漢文尾は翻譯躰忽にして小說躰忽にして戲曲躰文章は悉く鵺の如く其の亂れたるも亦甚だしと謂ふべし依て其の亂れたる所以を論じ而して其の救濟の策を講じ的切に剴切に將た簡明に之を述ふ

作文法

先つ自家の經驗上より得たる秘訣を說き初學者の爲めに叮嚀反覆作文の法を說く

作詩法

是亦作文法の如く先つ自家の經驗上より得たる秘訣を說き而して後古人の立てたる法式にして最も初學者の爲めに的切なるものを抄出す

和文軌範

和文の模範となるべきものを撰び章、節、段落等を明示す

時文軌範

今日に行ふべき文章を撰び亦その章、節、段落等を明示す

文話

言文の差別文義の異同等例を擧け譬を引き叮嚀反覆文話を爲せり

詩話

是れ亦古體近體等例を擧け譬を引き叮嚀反覆詩話を爲せり

日本文章論纂

此は文章に就て諸大家の爲したる總ての講演論說等を細大洩さず臚列したるものなり

附言世上作詩作文の法則を說くもの尠なしとせず然れとも此の書の如く平易に簡明に將た叮嚀に的切に之を講說するものあらす是故に購讀者非常に增加し其賣高の多きと他に比すべきものなく每輯數版するに至れり

岡田衆輔先生譯述

天壽成敗

全壹冊

特別價金拾四錢但全國無遞送料

開國三十年經營未だ半ばならざるも政治家は頻りに老衰し資本家は續いて家祀を斷ち事務家は不時に敗朽し學生は多ほく羸弱なるの傾きあり前途の光景想像に堪へたり此書は慶應義塾教員岡田衆輔先生が獨逸の醫學博士フヘランド氏の著書に就き心身使用の巧拙日常生活の得失速成老人の弊害、長壽健康の要則に關する所のものを抄譯し之を補ふに先生が多年の經驗と見聞とを以てせられたるものなれば晩成の大器量を以て社會の戰場に臨まんと欲する人は座右に欠く可からざる珍書なり

庚寅新誌記者　石川呑海君著

呑海物語

定價金十二錢　郵税金二錢

面白き小説を五十篇。呑海君の八文字屋風の文章で書いたものです。老人も婦人も子供も學生も紳士も讀んで爲になりて可笑しくて腹をよせる至極愉快な書です。御心ある御方は一日も早く御注文なされませ

右は總て前金を要す○郵便爲替は芝口局○郵券代用は(五厘形)一割增申受○通運便にて御廻金の節は配達料三錢增しにて御送金の事

東京市京橋區八官町十七番地

發行所　庚寅新誌社

發賣所　東京　東海堂○東京堂○巖々堂○武藏屋○大倉○丸善○須原屋○小林○盛春堂○福島屋○目黑○大坂梅原其他各書店

桐子園　三森幹雄宗匠　主筆
細鱗　三森松江宗匠　校正

俳諧自在法

全國無遞送料○前金に非れは一切送達せす
郵便切手代用は五厘切手に限る尤も一割增

全部金九十六錢　壹册金八錢

豫約之通十二卷完結

此書門を分つと八、曰く俳諧論、曰く發句を作る法、曰くてにをは、曰く假名遣ひ、曰く俳諧題鑑、曰く俳諧連句、曰く俳文作例、曰く俳話以て俳諧を學ふに便利重寶此上なき良書なり抑々俳諧を學ふもの其法に由らは◉聞いて居る心騷かし花盛り◉芭蕉葉は何になれとや秋の風◉鶯にふまれて浮くや竹柄杓◉名月や疊の上に松の影◉牧童樵夫の口より出つること難からさるなり況んや四方の諸君子が此俳諧自在法に由らるゝに於てをや咳唾皆珠玉吟詠自由自在なるへし主筆者其人の如きは天下廣衆の徧く知る所なれは固より本社の更に喋々するを要せさるなり

ユ7M16

伯爵寺島宗則君　著

民富邇言　全

壹部定價　金貳拾錢
郵稅不要

伯の緒言に曰はく百般の政術中先つ經濟運用の進歩を誘導せされは其完備を罄さゝるか故に治者此術を盡し富國安民の功を成し始て文明の域に漸むとを得へし方今本邦大に經濟運用の窘色を生し浸潤將に深からんとす若し我誘導の及ふ所に屬すれは之を衰退の自動に放任すへからす因て論理より論勢に至るまて廿六條を述ふと以て此書如何を知るへし

山口職人七十一番歌合

既製本九十五貞
一部定價　拾貳錢
郵稅　貳錢

右は山口縣人近藤清石先生の寄送にて嘗て庚寅新誌の文苑欄内に號を重ねて掲載したるものにして大に學者社會の稱譽を博したるものなりしか今般纂めて壹冊となし更に讀者の便に供す續々購讀の榮を給はんことを請ふ

附言各府縣の國文學諸先生にして其縣の職人歌合を寄稿せらるゝあらは本社は之を新誌に掲載して世間に弘く紹介すへし然らは啻に文學上の利益のみならす實業上の利益たる事大なるものあらん謹んて告く

特22
163

087402−000−1

特22−163

俳諧名誉談

三森　幹雄／著

M26
DBE−0745